

800S 一とニキ一セ 京府生外主費部本日

水 目

JCBL

THE JAPANESE CONFERENCE ON THE BIOCHEMISTRY OF LIPIDS

Faculty of Human Life and Environmental Sciences
Ochanomizu University
1-1, Otsuka 2-chome, Bunkyo-ku
Tokyo 112-8610, JAPAN
Tel & Fax: 81-3-5978-5752
JCBL@bio.m.u-tokyo.ac.jp

日本脂質生化学会事務局

〒112-8610
東京都文京区大塚 2-1-1
お茶の水女子大学生活科学部内
Tel & Fax: 03-5978-5752

脂質生化学研究
Circular

2003

日本脂質生化学会
(JCBL)

目 次

第45回日本脂質生化学会のお知らせ	1
日本脂質生化学会第1回イヴニングセミナーのお知らせ	5
平成15年度日本脂質生化学会 総会・幹事会のお知らせ	6
第45回日本脂質生化学会 発表演題の募集	8
第45回日本脂質生化学会 宿泊のご案内	12
研究会から日本脂質生化学会への発展にあたって	15
脊山洋右	
「第45回日本脂質生化学会」を企画するにあたって	17
宮澤 陽夫	
第44回日本脂質生化学研究会・研究集会を主催して	18
西島 正弘	
第44回日本脂質生化学研究会・研究集会に参加して	20
桑田 浩	
第43回国際脂質生化学会議 (ICBL) に参加して	22
八杉 悦子	
第44回国際脂質生化学会議 (ICBL) のご案内	27
第12回プロスタグランジン、ロイコトリエン及び生理活性脂質に関する国際会議に参加して	28
奥野利明	
文献検索から見たリン脂質研究のトレンド	30
小林 哲幸	
米国滞在時から考え続けていること	34
福嶋伸之	
会の活動状況	43
賛助会員	53
会則	54
学会事務の取り扱い内容と連絡先	56

第45回日本脂質生化学会のお知らせ

期日 : 2003年6月20日(金)・21日(土)
会場 : 仙台国際センター2階「橘」、3階「白樺1」及び「白樺2」
〒980-0856 仙台市青葉区青葉山
Tel : 022-265-2450 Fax : 022-265-2485

実行委員長: 宮澤陽夫 東北大学大学院農学研究科
〒981-8555 仙台市青葉区堤通雨宮町1-1
Tel : 022-717-8904 Fax : 022-717-8905
E-mail : miyazawa@biochem.tohoku.ac.jp

発表形式 : すべて口頭発表

A 講演: 発表15分 + 討論5分 = 20分

B 講演: 発表10分 + 討論5分 = 15分

講演時間は変更することもあります。

すべて液晶プロジェクターを使います。

(バックアップとしてOHPをご準備ください)

特別講演 : 「低密度リポタンパク受容体関連タンパク5 (LRP5) /Wnt
シグナルによるインスリン分泌並びに脂質代謝調節機構」

シンポジウム1 : 「植物脂質研究からのメッセージ」

シンポジウム2 : 「過酸化脂質研究のブレークスルー」

第1回イブニングセミナー : 「脂質生化学の現在と、未来への展望」

事前参加申込締切: 5月16日(金) (5月下旬頃に参加証を送付します)
参加登録費、懇親会費はできるだけ事前にお申し込みください。
別送いたしました振替用紙をご利用ください。名誉会員、賛助
会員の皆様には別途ご案内申し上げます。

集会参加登録費 : 事前参加登録費 一般 5000円 学生 3000円
: 当日参加登録費 一般 6000円 学生 4000円
(非会員で参加される場合要旨集代を別途申し受けます)

懇親会 日時：6月20日（金）会場：勝山館2階「瑞雲」
〒980-0011 仙台市青葉区上杉二丁目1-50
Tel：022-213-9188 Fax：022-213-9546
参加費：一般5000円 学生3000円
国際センターから懇親会会場へはチャーターバスを運行いたします。

宿泊関係：宿泊の予約をご希望の方は、ジェイティービー団体旅行東北支店が取り扱います（12-14頁）。共済組合等の公共宿泊施設は各自でお申し込みください。

会場への交通：JR仙台駅前西口バスプール9番乗り場から「宮教大・青葉台」, 「宮教大」, 「宮教大・成田山」, 「青葉通, 理・工学部 経由 青葉城址循環」線に乗り、「博物館・国際センター前」下車、徒歩1分（詳細は7頁）。

第45回日本脂質生化学会 特別講演およびシンポジウムのお知らせ

以下の特別講演とシンポジウムを予定しております。

特別講演：6月20日（金）

「低密度リポタンパク受容体関連タンパク5（LRP5）/Wntシグナルによる
インスリン分泌並びに脂質代謝調節機構」

東京大学先端科学技術研究センター システム生物医学ラボラトリー
酒井寿郎

シンポジウム1：6月20日（金）

「植物脂質研究からのメッセージ」

1-1. はじめに

岡崎国立共同研究機構 基礎生物学研究所 村田紀夫

1-2. ラン藻のアシルトランスフェラーゼ研究とグリセロ脂質生合成初発 過程の再評価

東京大学 大学院理学系研究科 西田生郎

1-3. 地球上で最も多量に存在する膜脂質モノガラクトシルジアシルグリ セロールの生合成、進化、機能

東京工業大学 大学院生命理工学研究科 太田啓之

1-4. ホスファチジルグリセロールが支える光合成機能

東京大学 大学院総合文化研究科 和田元

1-5. 植物のオキシリピン化合物の生合成と生理機能

山口大学 農学部 松井健二

1-6. ラン藻のデサチュラーゼ研究を端緒とする低温検知機構の解明

岡崎国立共同研究機構 基礎生物学研究所 鈴木岩根

シンポジウム2：6月21日（土）

「過酸化脂質研究のブレイクスルー」

- | | |
|---|------|
| 2-1. 過酸化物を介した遺伝子発現のレドックス制御
帝京大学 薬学部 | 鈴木俊英 |
| 2-2. 過酸化脂質の LC(CL)ESI/MS 分析
東北大学 大学院農学研究科 | 仲川清隆 |
| 2-3. アポトーシス制御因子としてのカルジオリピンヒドロペルオキシド
北里大学 薬学部 | 今井浩孝 |
| 2-4. 過酸化脂質によるタンパク質変性
名古屋大学 大学院生命農学研究科 | 内田浩二 |
| 2-5. 酸化 LDL の生成と代謝
帝京大学 薬学部 | 板部洋之 |

日本脂質生化学会第1回イヴニングセミナーのお知らせ

来る平成15年6月20日、15年度の本会年会の初日の夕刻、新しい試みとして、イヴニングセミナーを開催します。今年は、脂質生化学研究会が学会になった記念すべき年でもありますので、第1回セミナーの講師は、本会会長の脊山洋右先生にお願い致しました。

世の中の研究の流れは、ゲノム、タンパク質、糖鎖へ傾き、脂質生化学研究の将来を危惧する声も聴かれます。そんな心配は一時的なものと思います。ゲノムの解析が進み、表現系の代表である脂質の根源がより明確に姿を現してきて、脂質研究は益々遣りやすくなってきたと考えることもできます。これからまさに脂質生化学研究の第2幕が開こうとしているときに、脂質研究はより一層スリリングな方向に展開するものと考えております。とはいえ、脂質生化学会の将来を、真剣に考えなくてはならない時期であることには変わりありません。

6月20日の夕方、総会前の60分ほど、President Evening Seminar と銘打って、脊山先生から、“脂質生化学研究の現在と、未来への展望”（仮題）のような内容のお話をして戴けるものと思います。脂質研究に対する先生の熱い思いを、サイエンスに限定することなく、先生が培われてきた研究哲学も交えてお話し戴くことになっております。

脊山先生が、もう一度生まれ変わって研究をやり直すことが出来るとしたら、なにをターゲットになさるのか、21世紀の脂質研究はどのように発展してゆくのか、その夢と可能性と空想の世界を縦横に披瀝して戴けるでしょう。これからこの道で一旗揚げようとしている若手の研究者、学生さん達には、必見の舞台です。どうぞご期待下さい。

なお、このイヴニングセミナーが恒常化して、会員の誰でもが気楽に研究の夢を語れる舞台として定着してくれば、世話人としてこれに優る喜びはありません。

（世話人・伊藤俊洋、北里大・化学）

平成15年度 日本脂質生化学会総会のお知らせ

上記の総会を平成15年6月20日(金)18:15～18:35に仙台国際センター2階の「橋」において開催いたします。ご出席賜りたく存じます。

会長 脊山洋右

- 議題
1. 平成14年度事業報告
 2. 平成14年度決算報告ならびに監査報告
 3. 平成15年度事業計画ならびに予算案
 4. その他

平成15年度 日本脂質生化学会幹事会のお知らせ

上記の幹事会を平成15年6月20日(金)12:15～13:15に仙台国際センター2階の「桜2」において開催いたします。幹事・名誉会員の皆様のご出席をお願いいたします。

会長 脊山洋右

- 議題
1. 平成15年度日本脂質生化学会総会への提案事項の検討
 2. その他

第45回日本脂質生化学会会場のご案内

仙台国際センター（仙台市青葉区青葉山）、勝山館（仙台市青葉区上杉二丁目1-50）



交通のご案内

- 仙台空港からJR仙台駅へ
エアポートリムジンバス利用の場合 所要時間 約40分 片道910円
(空港正面玄関前より出発)
- タクシー利用の場合 所要時間 約40分 片道約5000円
- JR仙台駅から仙台国際センターへ
バス利用の場合 所要時間 約10分 片道180円
(JR仙台駅西口バスプール9番乗り場から「宮教大・青葉台」、「宮教大」、「宮教大・成田山」、「青葉通、理・工学部経由 青葉城址循環」線に乗り、「博物館・国際センター前」下車 徒歩1分)
- タクシー利用の場合 所要時間 約7分 片道約900円
- 懇親会会場「勝山館」へ
仙台国際センターからは20日夕方にチャーターバスを運行いたします。
JR仙台駅からは「地下鉄仙台駅」で乗車し、「北四番丁駅」で下車 徒歩5分。
タクシー利用の場合、JR仙台駅から所要約10分 片道約1000円。

第45回日本脂質生化学会演題の募集

○演題の申し込みについて

1. 必要事項を記入した演題申し込みとコピー2部
2. 講演要旨とコピー2部

1. 2. を揃えて、平成15年3月31日(月)までに日本脂質生化学会事務局宛にお送りください。さらに、演題申し込みの内容をE-mailでJCBL@bio.m.u-tokyo.ac.jp宛にお送りください。E-mailを使用にならない方はテキストファイルでフロッピーディスクに保存したものを1. 2. に添えてお送りください。(10頁参照)

講演要旨は、A4の白紙(2枚以上4枚以内)に別掲の要領(8頁)で作成してください。

演題採択は審査により決定しますのでご了承ください。

○講演要旨送付先

〒113-0033

東京都文京区本郷7-3-1

東京大学医学部細胞情報内

日本脂質生化学会抄録受付

Tel : 03-5841-3454

Fax : 03-3813-8732

E-mail : JCBL@bio.m.u-tokyo.ac.jp

○学会についての問い合わせ先

〒981-8555

仙台市青葉区堤通雨宮町1-1

東北大学大学院農学研究科 宮澤陽夫

Tel : 022-717-8904

Fax : 022-717-8905

E-mail : miyazawa@biochem.tohoku.ac.jp

第45回日本脂質生化学会 講演要旨作成要領

1. 講演要旨はA4の白紙に、縦260mm×横170mmの枠中におさめて印刷してください。原則として、字の大きさは12ポイントにしてください。要旨集印刷の際、4/5程度に縮尺されて印刷されますので、ご注意ください。図表は写真やコピーを糊付けしても結構です。
2. 1枚目の要旨には、演題名、氏名、所属、要旨を下記の例を参考にして、次の要領で書いてください。
演題名：前角8文字目から書き始め、2行以内におさめる。
氏名・所属：演題名より1行空ける。全角8文字目から氏名を書き、所属は適切な略記を用いて()内に入れる。
要旨：氏名・所属より1行空ける。1文字空けて書き始める。全体を枠で囲む。
本文：要旨より2行空ける。
3. 講演要旨の送付にあたって
講演要旨の裏側に鉛筆で印刷順を記し、コピー2部と共に厚紙等で保護して、7頁の演題募集の要領に従って送ってください。

(例)

エゾウコギ *Acanthopanax senticosus Harms* がマクロファージのACAT活性に与える影響

依田勉一、十勝花江(未来大・応用生命)、北海太郎(代替医療大・生化)

ウコギ科のエゾウコギ *Acanthopanax senticosus Harms* の新規脂質成分はマクロファージにおけるACAT活性の調節に関与する……………

先に我々は、エゾウコギの新規脂質活性成分を報告したが……………

第45回日本脂質生化学会 演題申し込み 記入要領

下記の各項目をワープロ等で入力しA4用紙にプリントアウトしたものとコピー2部を演題申し込みとして、講演要旨と共に提出してください。同時に、そのテキスト内容のみ(特殊文字や文字飾りを除いたもの)を1. E-mailの本文として、事務局のアドレス(JCBL@bio.m.u-tokyo.ac.jp)に"Subject: 演題申し込み"として送るか、2. テキストファイルとして2HDのフロッピーディスク(Macintosh、Windowsいずれも可)に保存して演題申し込み、講演要旨と共に送るかしてください。2. の場合は、ディスクのラベルに登壇者名を記入してください。必ず最終的な情報を入力し、講演要旨を送付する日に送ってください。E-mailのみの受付は行いません。

記入項目

- 演題 : 1. 演題名 2. 演者全員(所属番号)(登壇者に○) 3. ふりがな 4. 所属
5. 演題領域(下から選択) 6. 希望演題区分(A 講演 20分、B 講演 15分)
- 連絡先 : 7. 郵便番号 8. 住所 9. 氏名 10. Tel 11. Fax 12. E-mail address
- 送付 : 13. 演題申し込みの送付日、方法
- 通信欄 : 14. (発表期日の希望、演題順の希望などがあれば記入)
- 演題領域 : A: 単純脂質、脂肪酸 B: ステロイド、胆汁酸 C: リン脂質 D: 糖脂質
E: リポタンパク質 F: 脂質メディエーター G: 細胞内シグナル脂質
H: 酵素、代謝 I: 生体膜 J: 病体、栄養 K: その他

記入上の注意

番号に続いて、[tab](長さは問わない)を入力し、続いて12ポイントで記入。項目名は書かないこと。数字、記号、スペースは半角。各項目は[改行]で区切る。12,14. は無ければ空欄。特殊文字や文字飾りは下線で指示し、E-mail やディスクでは送らないこと。

プリントアウト例

1. エゾウコギ *Acanthopanax senticosus Harms* がマクロファージの ACAT 活性に与える影響
2. ○依田勉一(1)、十勝花江(1)、北海太郎(2)
3. よだべんいち、とかちはなえ、ほっかいたろう
4. (1) 未来大・応用生命、(2) 代替医療大・生化
5. B か E
6. A
7. 080-8555
8. 帯広市稲田の森 2-11 未来大学応用生命科学科
9. 依田勉一
10. 099-999-1111
11. 099-999-9999
12. yoda@bac.obihiro.ac.jp
13. 3月23日、E-mail
14. 十勝花江の演題の次にしてください

講演要旨と演題申し込みを送る際には、この頁をコピーして下記のラベルを切り抜き、封筒にお貼りください。締切は平成15年3月31日(月)です。

〒113-0033

東京都文京区本郷7-3-1
東京大学医学系研究科
生化学教室 細胞情報部門

日本脂質生化学会抄録受付

第 45 回日本脂質生化学会 ご宿泊のご案内

この度「第 45 回日本脂質生化学会」が仙台で開催されるにあたり、皆様方のご宿泊手配のお手伝いを JTB 団体旅行東北支店がお世話させていただくこととなりました。皆様方のご利用を心よりお待ちしております。

株式会社ジェイティービー
団体旅行東北支店 E C センター

ご宿泊のご案内（主催旅行）

宿泊設定日：平成 15 年 6 月 19 日(木)・20 日(金)・21 日(土)
宿泊条件：1 泊朝食付、サービス料税金込み、お一人様当りの料金

ホテル名	部屋タイプ		仙台国際センター までの所要時間	申込記号 (地図番号)
	シングル	ツイン		
仙台エクセルホテル東急	11,000	8,900	徒歩 15 分	A
仙台ワシントンホテル	9,000	-	徒歩 15 分	B
ホテルパールシティ 仙台	7,900	-	徒歩 20 分	C

★禁煙ルームのご要望がございましたら、申込書の備考欄にご記入ください。
(喫室でご要望に添えない場合もございます。予めご了承ください。)

★上記料金は、1 泊朝食付税・サービス料込みの料金です。
★ツインの料金はお二人様利用の場合の一人あたり料金です。
★最少催行人員 1 名

◆お願い・ご注意

★お支払い方法は、クレジットカード又は銀行振込でお願いします。
★朝食が不要の場合でも、特別料金のためご返金できませんのでご了承ください。
★個人勘定及びそれに伴うサービス料消費税は各自ご清算をお願いします。
★お部屋には数に限りがございますので、先着順にご予約させていただきます。
★ご希望のホテルが満室の場合は、他のホテル（表記以外のホテルも含む）をご案内させていただく場合がございます。予めご了承ください。
★この旅行は主催旅行です。必ず旅行条件をご確認ください。

◆お申込方法

別紙申込書に必要事項をご記入の上、下記宛に FAX または郵送にてお送りください。なお、電話でのお申込はご遠慮ください。

- お申込締切日：2003 年 5 月 30 日（金）必着
- 申込締切日後に各種予約券、ホテル案内図を郵送にてお送りいたします。
- お支払いが振込みの場合は請求書、振込依頼書、クレジットカードの場合はクレジットカード清算控えを併せてお送りします。

◆変更・取消について

お申し込み後に変更・取消が生じた場合は FAX・郵送またはメールにて早めに JTB 団体旅行東北支店までご連絡下さい。なお、お取消につきましては別途取消料がかかりますので予めご了承願います。取消料については該当のご旅行条件をご覧ください。

<ご旅行条件（要約）（主催旅行）>

主催旅行契約

この旅行は(株)ジェイティービー（東京都品川区区東品川 2-3-11 国土交通大臣大臣登録旅行業 64 号。以下「当社」という）が主催する旅行であり、この旅行に参加されるお客様は当社と主催旅行契約（以下「旅行契約」という）を締結することになります。又、契約の内容・条件は各プラン毎に記載される条件のほか、下記条件、別途お渡しする旅行条件書（全文）、出発前にお渡しする確定書面及び当社旅行業約款主催旅行契約の部によります。

契約の成立

(1) お申し込みをいただいた後に、順次、回答と確定書面（予約確認書及び最終旅行日程表等）・旅行条件書全文・ご請求書をお送りいたします。

(2) 旅行契約は当社が旅行代金を受領した時に成立するものとします。

変更および取消について

お申込後に変更および取消される場合には、FAX 又は E-mail にて早めにご連絡ください。なお、取消の場合は、下記の取消料を申し受けます。

取 消 日		取 消 料
旅行開始 日の前日 から起算 してさか のぼって	1) 4 日目にあたる日以前の解除	無 料
	2) 3 日目にあたる日以降の解除	旅行代金の 20%
	3) 当日の解除	旅行代金の 50%
	4) 旅行開始後の解除又は無連絡不参加	旅行代金の 100%

主催 株式会社ジェイティービー

国土交通大臣登録旅行業第 64 号

日本旅行業協会正会員

住所：東京都品川区東品川 2-3-11 〒140-8602

一般旅行業務取扱主任者：斎藤 辰彦

◆お申込・お問い合わせ先

JTB 団体旅行東北支店

〒983-0852 仙台市宮城野区榴ヶ岡 4-6-1 東武仙台第一ビル 6F

一般旅行業務取扱主任者：斎藤 辰彦 担当：高野、福田

電 話：022-296-3361 FAX：022-296-3327

営業時間：月～金 9:30～17:30 土・日・祝日 休業

Mail: convention_g@thk.jtb.co.jp

第45回日本脂質生化学会 宿泊申込書

月 日 ()
受付番号 ()

送付先 FAX : 022-296-3327

※郵送でお送りいただけます。

ふりがな			〒		所属	
申込代理店 氏名	種別番の 送付通知先		TEL E-mail		FAX	
N o.	フリガナ 氏名	年 齢	性別	宿泊申込記号 第1部記 第2部記	宿泊日 6/20 6/21	備考 予約の都合、口座振替
例	わがや 仙台 太郎	50	男	A B <u>(シングル)</u> ツイン	O	仙台 花子 森短ルーム希望
1			男女	シングル ツイン		
2			男女	ツイン シングル		
3			男女	ツイン シングル		
4			男女	ツイン シングル		

※この宿泊ホテルの運賃は、他のホテルへ変更を願っていることが体りますので予めご了承ください。
 旅費以外の、個人にピーエお平元にお持ちください。都府道送料等は、正確にご記入ください。

◆送付先 ジェイティビー一園体旅行東北支店
 〒983-0832 宮城県仙台市宮城野区柳田4-6-1 東武仙台駅1ビル6階
 TEL : 022-296-3361 FAX : 022-296-3327
 E-mail : convention_g@cht.jtb.co.jp

クレジットカードでお支払いをご希望の場合	
カード会社名	年 月
有効期限	
カード番号	
カード名義	
ご 署 名	年 月 日

研究会から日本脂質生化学会への発展にあたって

会長 脊山 洋右

脂質研究者の集まりである日本脂質生化学研究会が発足したのは1960年10月30日のことで、1953年にブリュッセルで産声をあげたICBLの日本版として組織されたものであった。

第1回の研究集会が開かれたのは翌年の1961年6月7日であった。この年には11月7日に第2回研究会が開催され、1962年6月16日に第3回、同年11月2日には第4回と立て続けに研究集会が行われている。1963年6月7日に第5回を行ってからは年1回ということが定着し、2002年には第44回を数えるに至っている。

8年先行していたICBLは年1回の開催であり、さらに1954、1959、1961、1964、1971、1978および1982年は開催されなかったので、2002年に第43回ICBLをオーストリアのグラーツで行うというように、開催数では逆転が起こっている。ちなみに1988年には東京で第29回ICBLを行い、これはヨーロッパ以外で開かれた最初の会議となった。

この脂質生化学研究者の集まりが日本脂質生化学研究会と命名され、学会とは称さなかったのは、「あくまでも研究会らしく活動し、学会化してはならぬ」という創立に当たられた先生方の精神が脈々と貫かれてきたからである。会則にも脂質生化学「研究者相互の連絡および親睦を深めることを目的とする」とうたっているのはこの主旨を表したものである。以来、40年にわたって「研究会」を名のってきたし、これまでも「学会」への名称変更の提案が何度かなされたが、創立の精神に反するというところで採用されるには至らなかった。

一方、ICBLはというと、International Conference on Biochemical Problems of Lipids でスタートしたが、早くも第2回では International Conference on the Biochemistry of Lipids と改称し、2001年のベルゲンで開かれた第42回からは International Conference on the Bioscience of Lipids と名称を変えている。Biochemistry を Bioscience に変更したのは、名称を幅広いものにして参加者を増やそうという思いが込められている。ICBL では毎回、異なった3ないし4件のトピックスを取り上げて、1会場で3日間おこなうというのが慣例になっている。Biochemistry という言葉では扱う分野が狭すぎ

ることと、若者にとってイメージが古すぎるという意見が基となって改称がおこなわれた。

このたび日本脂質生化学研究会が日本脂質生化学会に改称した動機はこれとは異なっている。大学の研究者にとっては最近盛んに行われるようになった大学の「自己評価」に際して学会への参加数が問われることがあり研究会よりも有利である、企業の研究者にとっては学会のほうが参加するに当たって会社からの了解を得やすいし、旅費の支給も受けやすい、などというメリットが挙げられた。企業に対して賛助会員に加わることをお願いする際や、講演要旨集に広告を出してもらう際にも有利であるという経済的な理由も挙げられた。地方で開催する際には「学会」であれば市や県からの補助が得やすいという事情もある。

2001年の帯広で開かれた研究集会に伴う幹事会、総会で提案され、2002年の東京の研究集会の際の幹事会、総会で論議を尽くした上で、2003年1月1日をもって「日本脂質生化学研究会」を「日本脂質生化学会」と改称することが決定された。なお、英語名称は従来どおり「The Japanese Conference on the Biochemistry of Lipids」、略称「JCBL」を用いることになっている。

この集まりは法人格のない任意団体なので、このような名称の変更にはこれといった難しい問題は無いが、イメージチェンジするこの機会をとらえ、会の活性化を行いたいと考え、新井洋由、山田信博、伊東信、横溝岳彦氏らによるワーキンググループを作って参加者が魅力的に思えるような学会とする方策を検討している。名称変更が活性化の起爆剤になることを願ってやまない。

(2003.1.10)

「第45回日本脂質生化学会」を企画するにあたって

実行委員長 宮澤陽夫

仙台で本会が開催されるのは私が大学院生の頃に金田尚志先生が主催されて以来と思います。そう考えると望外の喜びで感じます。

帯広の藤野安彦先生のもとで穀物脂質の構造分析をし、仙台で金田先生に脂質栄養と過酸化脂質研究をとおしてヒトの健康と脂質とのかかわりを習い、あわせて東北大学医学部の当時の後藤由夫先生と及川眞一先生に誘われて動脈硬化・糖尿病の分野にも興味を持つてきました。その頃から本会で発表させていただいていますが、発表時間の長いこと、討論時間の長いこと、しかも当時は一会場だったので専門の違う先生からもご質問をいただけたことなど、誠に勉強になる会であってこれは今後も基本的に変わらないものと信じております。

20世紀から21世紀に踏み込んだ今日、脂質の世界にもまったく新しい千年紀が始まっています。それにふさわしい特別講演に「脂質代謝異常」に関して東大先端研で新進気鋭の酒井寿郎教授にお願いしました。リポタンパク受容体を介したカイロミクロン代謝の調節機構についての最新の知見をお話いただきます。また、シンポジウムには「植物脂質研究からのメッセージ」と「過酸化脂質研究のブレイクスルー」のふたつを企画しました。進展著しいこの2領域の研究前線がおわかりいただけることと思います。植物脂質セッションの企画には山田晃弘先生と西田生郎先生（東大・理）のご協力をいただきました。また、本年会から始める第1回のイブニングセミナーとして、脊山洋右会長に「脂質生化学研究の現在と、未来への展望」についてお話をさせていただきます。若手研究者・学生には必見です。伊藤俊洋先生（北里大・化学）がお世話くださいました。御礼申し上げます。そしてランチョンセミナーも考えております。少々盛りだくさんでスケジュールがきつくなりますが、お楽しみいただけると幸いです。

会場は仙台国際センターです。仙台駅から青葉山の仙台城址に向かったところです。懇親会はそこから移動してすこし仙台式い趣のある勝山館でおこないます。全国から多数のみなさまが参加してくださいませよう心よりお待ちしております。

それでは6月に仙台でお会いできますことを楽しみにしております。

第44回日本脂質生化学研究会・研究集会を開催して

国立感染症研究所細胞化学部 西島 正弘

第44回日本脂質生化学研究会・研究集会は2002年6月14日(金)・15日(土)の2日間、早稲田大学国際会議場で開催されました。参加者は287名、一般演題は66題でした。14日は、サッカーワールドカップで日本の決勝リーグ出場が決まる試合が行われた時と重なり、参加者の減少が危惧されましたが特に問題となることもありませんでした。逆に、14日の総会開始前には第一会場の大スクリーンで日本が決定的な2点目をあげるシーンを多くの参加者が観戦することができ、44回研究集会を深く記憶に留めるものとしてくれた感があります。

一般演題数66は東京での開催の割には少な目でしたが、発表内容は良かったかと思います。今回、発表はスライドと液晶プロジェクターで行いましたが、約6割が液晶プロジェクターによる発表でした。液晶プロジェクターはまだトラブルが発生することが多いですが、本研究集会ではそのようなこともなく、無事に行われました。今後はますます液晶プロジェクターによる発表が増すものと予想されます。

15日には本研究集会では初めての試みとしてランチョンセミナーを企画し、「プロテオミクスからの生命科学研究」という演題で都立大大学院理学研究科磯辺俊明教授にご講演して頂きました。ランチョンセミナーに引き続き、「脂質研究の新しい方法とユニークな視点」というタイトルのシンポジウムを行い、シンポジウムの前半では脂質の質量分析の話題を取り上げ、後半では思いがけず“あぶら”に遭遇した先生方にユニークな視点からの研究成果をご講演頂きました。土曜日の午後の企画でしたが数多くの方に参加して頂き、共に盛会でした。機器展示は、質量分析機器に関連する企業5社に出展して頂きました。

総会では本研究会を日本脂質生化学会とすることが決定し、来年からは研究集会から学会となることが決定されました。懇親会は14日午後6時30分からリーガロイヤルホテル東京で開催され、約100名の方に参加して頂きました。日本のワールドカップ決勝リーグ進出決定の直後でもあり、参加者そろって良い気分での懇親会となったことと思います。

本研究集会を開催するに当たり、受付・会場等の仕事を手伝って頂きま

した清水孝雄教授室、新井洋由教授室、工藤一郎教授室の大学院生、私の研究部の部員、日本学会事務センター、ランチョンセミナー協賛企業、機器出展企業、その他多数の方々にご援助頂きました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

第44回日本脂質生化学研究集会に参加して

昭和大学薬学部衛生化学教室助手 桑田 浩

第44回日本脂質生化学研究会・研究集会は2002年6月14日(金)・15日(土)の二日間にわたって、早稲田大学国際会議場で開催されました。今年の本研究集会では、残念ながら私は演題発表をいたしませんでした。私たちの教室から昨年度修士過程を修了した二名が発表させていただきました。この期間中は私にとっても気が気ではなかったことを覚えています。と言うのは、前述の二人がどのような質問をされ、どのような受け答えをするのかという心配に加えて、本研究集会と同時開催で行われていた? FIFA ワールドカップの一次リーグ(日本対チュニジア戦)で、日本チームが決勝リーグに進出できるのかという心配があったからです。我が日本チームの結果は、演題終了後に催された特別試写会?で放映された通り2-0で大勝利しました。一方、発表者の彼らに発表をした感想を聞いたところ、「ほかの学会と比べて、より専門的な質問があったので、とても勉強になりました。」「的確で、鋭い質問をされたので舞い上がりました。」と感じたそうです。最近の傾向として、なかなか口頭発表の機会に恵まれない大学院生にとっては、人前で自分の研究成果を発表し、専門分野の先生から様々な意見をいただき、それについて討論したことは非常に良い経験になったのではないかと考えています。また、私に至りましても、喫煙所という憩いの場で、日頃あまりお話をする機会のない先生方とディスカッションする機会に恵まれ、様々なサジェスションをいただいたことで自分の未熟さを感じつつも、非常に有意義な2日間であったことを記憶しています。

さて、本研究会では私は、脂質というキーワードのもと、その検出・同定法から生合成あるいは代謝に関わる酵素群の研究まで、極めて幅広い分野で研究を行っている先生の講演を数多くお聞きし、脂質が生体内で、時に善玉として、また、時に悪玉として働く二面性を持つ微妙な物質であることを再認識いたしました。個人的には、名市大の田口先生のグループが研究を進めておられます質量分析計を用いた脂質のメタボローム解析に非常に興味を持ちました。近年、遺伝子情報の解読によって、約三万種類にのぼるタンパク質が存在することが明らかとなり、そのタンパク質の全体を解析するプロテオミクスと呼ばれる研究が注目されています。このような研

究において、質量分析が有用なツールとなることが、本年12月に田中耕一先生がノーベル化学賞を受賞されたことから明らかであり、極めて微量で、しかも恐らく全タンパク質の種類に匹敵する種類が存在する可能性のある脂質の分析にこの質量分析を取り入れ、それらを網羅的に解析することは、若輩者の自分でさえその有用性を認識しました。タンパク質の機能を知る目的で、ノックアウトマウスや酵母のtwo hybridシステム等による研究が進んでいるのは周知のとおりですが、(脂質代謝に関わる)酵素が実際に生体内で「酵素が作用して、どのような代謝物・最終産物を產生しているか?」あるいは「オーファン受容体のリガンドは何か?」などは、なかなか前述の方法のみでは解明することは困難であり、これらに加えて酵素の代謝物の実態を把握することにより、相乗的にプロテオーム研究が進歩することと考えられます。これらのことを考えると、改めて脂質の研究分野はこれからさらに進化する可能性を秘めていることを確信しました。

最後になりましたが、本研究会で多くの演題を円滑に進行させ、このように成功させるには、実行委員長の西島先生をはじめとして準備に携わった多くのスタッフの大変なご苦勞があったものと思われます。この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

第43回 国際脂質生化学会議(ICBL)に参加して

国立国際医療センター研究所 八杉 悦子

第43回国際脂質生化学会議 (International Conference on the Bioscience of Lipids, ICBL) が2002年9月11日より14日までオーストリアのグラーツで開催された。オーストリア第二の都市グラーツは、ウィーンの南、シュチリア州の州都で人口25万人、15世紀に皇帝フリードリヒ三世が居城を築いた歴史的な町である。中世の町並みや歴史的建造物が良く保存されていることから、1999年にはユネスコの世界遺産に登録された。大学の歴史は古く1585年に開設され、1590年代には天文学で有名なケプラーが教鞭を執ったので有名である。現在は総合・科学・芸術系など3つ大学がある大学都市で約4万人の学生が在籍している。2003年グラーツはヨーロッパの文化都市に指定され、音楽などさまざまな芸術イベントが計画されており、劇場などの建設も急ピッチで進められている。

私のICBLへの参加は1988年に日本で開催されたとき以来で実に14年ぶりであった。今回のICBLへの参加目的は、私が事務局を努めている「生理活性脂質データベース」(LIPID BANK for Web)の宣伝であった。生理活性脂質データベースは国立国際医療センター研究所と科学技術振興事業団の共同研究により、インターネットで脂質化合物に関する情報を無料で発信するシステムとして構築され、1999年秋に一般公開された (<http://lipid.bio.m.u-tokyo.ac.jp/>)。現在までに約6,200件の脂質化合物レコードが納められており、日本脂質生化学会の会員の協力により、データ入力・更新がおこなわれている。今年4月にシステムの改良をおこない、また画面も刷新されたのでその報告と、一般公開後ICBLホームページのリンク集に掲載していただいているので実際にユーザーの意見を聞きたいという希望があった。

今回のICBLの主催者はTechnical University of Graz (TUG)・生化学部門のGuenther Daum教授で、同大学が会場となった。この大学では1975年、1985年と過去に2回ICBLが開催されたそうである。本会議の今年のトピックは1. Lipids of microorganisms, 2. Lipid transport and assembly of lipids into membranes, 3. Cell biology and molecular biology of lipases and phospholipases, 4. Pathobiochemistry of lipidsであった。各トピックの内容に沿ってPlenary Lecturesが20題、一般演題の中から選ばれたShort Oral Presentations 13題、

そしてPosters 217題が発表された。内容はChemistry and Physics of Lipids 118, (1-2) 1-126, 2002に掲載されている。参加者は世界36ヶ国から約320人で、そのうちの割が日本人であった。

会議の前日(9月10日)、私はウィーンよりユネスコ世界遺産に登録されているセンメリング鉄道(1854年開通した初めてのアルプス越え鉄道)を経由してグラーツの町に入った。9月11日より開会式と最初のプログラム1. Lipids of microorganismsに沿った発表が始まった。この見聞録を書くことが分かっていたら開会式に参加したのだが、その朝は翌日から始まるポスター発表のためにポスター貼付、また「生理活性脂質データベース」のパンフレットの配布許可をとったりと今回参加の目的を達成するための準備に追われた。またロビーに自由に使用できるコンピューターがあったので、インターネットを介してLIPID BANK for Webへのアクセスが可能であるかを試みた。無事にアクセスは成功したのだが、コンピューターのキーボードがオーストリア語仕様でウムラウトなどが並んでいるため、入力には苦労した。やっと準備が整って会場に入ると産業医科大学の古賀洋介教授の講演が始まっていた。古賀先生はメタン生成古細菌である中等度好熱性 *Methanobacterium thermoautotrophicum* を用いて細胞膜脂質であるエーテル型脂質アーキチジルセリン合成に関わる酵素の性質や特性について新知見を発表された。また、基礎生物学研究所の村田紀夫教授はシアノバクテリア(ラン藻)では低温化に伴い脂肪酸の不飽和度が調節されるが、その調節機構について特に全遺伝子配列が決定されている *Synechocystis* sp. PCC 6803を用いてのDNA microarray解析結果を示された。お二人の先生方の御講演はいずれも液晶プロジェクターを使用され美しい画像と共に、迫力のある発表で聴衆を引きつけた。

9月12日は2番目の課題、Lipid transport and assembly of lipids into membranesに沿って10演題の発表があった。Dr. Deborah A. BrownによるLipid raftの講演は非常に早口の英語で次から次へと細胞膜についての新しい考え方が提示され、圧倒された。細胞膜にはcholesterolやglycosphingolipidの多いtight packingなraft部分と貫通型タンパク質を含むリン脂質の多いloose packingな部分が共存しているという膜モデルや、golgiからplasma membraneに膜成分が移動するためのシグナルとしてcaveolin-1タンパク質のどの部分が必要かなど多彩な内容であった。その他、動物細胞から酵母や植物も含めてそれぞれの脂質膜や細胞内での脂質輸送に関するホットな話題提供があった。

9月13日は3番目の課題、Cell biology and molecular biology of lipases and phospholipasesであった。スウェーデンのDr. Cecilia Holmはホルモン感受性リパーゼの構造、機能、調節機構の詳細について、またそのホルモンのノックアウトマウスを用いた結果に関しての知見を発表された。その他に lipoprotein lipase や動脈硬化症における phospholipase A2 の発表もあった。またドイツのDr. Fritz SpenerがEUにおける脂質科学・工学の発展のために2000年10月に設立された

The European Federation for the Science and Technology of Lipids (Euro Fed Lipid) の紹介をされた(<http://www.eurofedlipid.org/>)。今まで各国にそれぞれ脂質関連の学会があったが、それをより発展させてEUとしてまとまった活動していきたいという主旨であった。分科会の中に脂質栄養部門であるNUTRILIPIDがあり、2002年11月にフランス・ストラスブルグで初回の会議が開催される予定で、参加への呼びかけがあった。[Development of European Lipid Science for the Improvement of Human Nutrition & Health (<http://www.eurofedlipid.org/nutrilipid/>)]

9月14日の最終日はPathobiochemistry of lipidsに沿っての発表があった。オランダのDr. Hans R. Waterhamはコレステロール生合成過程における新規の先天性代謝異常症について発表した。このセッションの最後に次期ICBLの会頭であるイギリスのDr. Richard Bruckdorferが動脈硬化症における病理生化学を総括する講演を行った。

一方、ポスターは会期中12日から14日まで展示されており、毎日30分から1時間ずつ質疑応答の時間が組まれていた。脂質分野の幅広い内容で日本人若手研究者のポスター発表も多く、それぞれ活発な討論がなされた。この学会は1996年の第36回ICBLより毎年、科学的・美的センスから優秀なポスターにポスター賞が授与される。今回は酵母の小胞輸送に関連するacyl-Co A binding proteinの役割を発表したデンマークのFaergeman, N.ら、エンドトキシンによる炎症反応に対して酸化リン脂質の働きを示したオーストリアのBochkov, V.ら、動脈硬化におけるLiver X receptorの新しい局面を発表したイタリアのCaruso, D.らが受賞した。私達の「生理活性脂質データベース」の発表に対する反響は、意外にも多くの参加者がLIPID BANK for Webにアクセスしたこともないという事実であった。やはり、これから更なる宣伝活動と皆が使いやすいデータベース構築の必要性を実感した。また利用したことのある研究者からは、特に糖脂質がよくできていると賞賛された。大学でこれからバイオインフォマティクスの講

義予定の研究者からは、脂質の網羅的なデータベースは世界中でLIPID BANK for WebのみであるからGenBankなどと並べて取り上げようといわれ感激した。また数人から新規物質をWeb登録するにはどうしたらよいかと質問され、これは今後の課題となった。

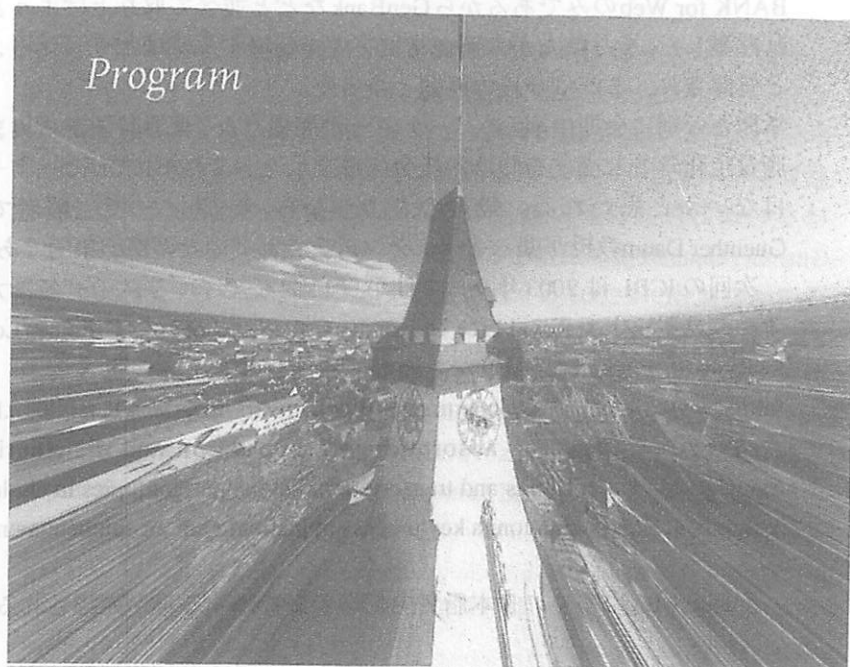
学問とは別に会期中4回のパーティーが開催され、世界各国から集まった脂質生化学者と交友を暖める機会に恵まれた。これがICBLの良き一面ではないかと思われる。最後のさようならパーティーで主催者であるGuenther Daum教授が楽しそうにダンスをされていたのが印象的であった。

今回のICBLは2003年9月7日から11日までイギリスの有名な大学町オックスフォードでRoyal Free University College school of Medicine (London) のRichard Bruckdorfer教授が主催して開催される。

(<http://www.rfc.ucl.ac.uk/departments/Biochemistry/meetings/ICBL2003.htm>)
会議のテーマは1. The absorption, transportation and distribution of triacylglycerols. 2. Lipids and transcription factors. 3. Hot topics in cholesterol research 4. Lipid oxidation: a key process in pathology or an epiphenomenon?である。

今回と同様に多くの日本脂質生化学者が参加する事が期待される。

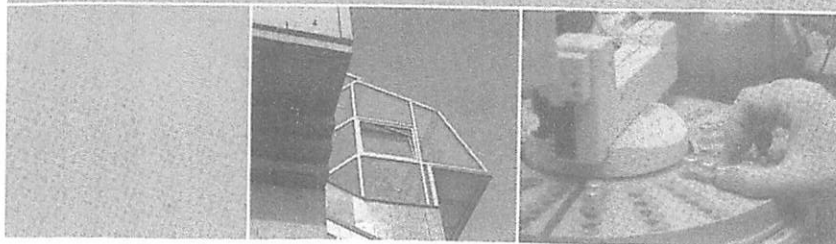
Program



43rd International Conference on the Bioscience of Lipids

GRAZ, AUSTRIA

September 11-14, 2002



第44回 国際脂質生化学会議

44th International Conference on the
Bioscience of Lipids(ICBL)

日時: 2003年9月7日(土)~11日(木)

場所: オックスフォード(イギリス)

Chairperson: Richard Bruckdorfer

Committee: Keith Frayn, Geoffrey Gibbons

David Saggerson, Keith Suckling,

Klaus Whale, Victor Zammit

Topics:

1. The transport and distribution of triacylglycerols
2. Lipid and transcription factors
3. New aspects of cholesterol research
4. Lipid oxidation: a key process in pathology or an epiphenomenon?

演題締切: 2003年5月1日(木)

宿泊:

オックスフォード大学内の宿泊施設(250名)

Correspondence:

Professor Richard Bruckdorfer

Dept. of Biochemistry and Molecular Biology,
Royal Free and University College Medical School,
Rowland Hill Street,

London NW3 2PF, U.K.

Phone: +44(0)20-7830-2255

Fax: +44(0)20-7794-9645

E-mail: bruckd@rfc.ucl.ac.uk

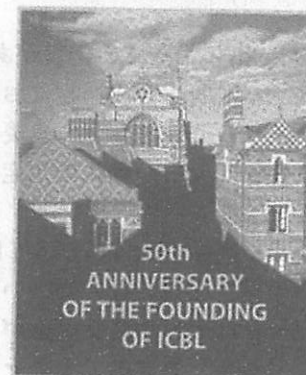
<http://nutrition.food.ocha.ac.jp/icbl/> <http://www.rfc.ucl.ac.uk/departments/Biochemistry/ICBL2003.htm>

にアクセスしてください。

44th International Conference on the Bioscience of Lipids (ICBL)

Oxford, UK

September 7-11 2003



第12回プロスタグランジン、ロイコトリエン及び 生理活性脂質に関する国際会議に参加して

東京大学医学系研究科細胞情報 奥野利明

第12回プロスタグランジン、ロイコトリエン及び生理活性脂質に関する国際会議は、魅惑の国トルコのイスタンブールにおいて、2002年8月25日から29日まで開催された。イスタンブールは、人々の生きるパワーに溢れる大都会（人口900万人）である。そして、歴史的に東西文化の交差点として栄えてきた。トプカプ宮殿、ブルーモスクやドルマバフチェ宮殿など、多くの華麗な世界遺産が、かつての栄光を今に伝えている。イスタンブールへの直行便を唯一運行しているトルコ航空を利用し、私は未知の国トルコへ旅立った。飛行機でとなりに座った中年のトルコ人が、工学系の研究者であることがわかり、彼が都立大への出張帰りであること、私が学会でトルコに向かうことなどを話した。別れる際に名刺を頂き、パスポートやお金を無くしたり盗まれたりしたら、直ぐに連絡してくれと言われた。トルコに着く前から、トルコ人の親切さを体感することができた。

学会の前々日の夕方、イスタンブールのアタチュルク国際空港に到着した。その日は予約してあったホテルに直行し、ゆっくり旅の疲れを取ったが、翌日はイスタンブール市内を散策することにし、旧市街を中心に歩いた。商売をしているトルコ人は、日本人と見るや声をかけてきた。慣れないうちは、多少、面倒にも感じたが、危害の恐れは感じなかった。日本人と見ると空手の真似をしてみたりする人もいて、人なつっこい国民性を感じた。

さて、翌日よりイスタンブールの喧噪とは無縁の超一流スイスホテルで国際学会が行われた。この学会の前にベルリンでも学会があり、アメリカ人の多くは、そちらのみ参加し、イスタンブールには来なかったことを知った。トルコ人の多くは厳格なイスラム教徒ではないが、トルコが準イスラム圏であることは確かである。また、同時多発テロからほぼ一年の時期でもあり、アメリカ人は警戒するのであろう。その結果、学会にはアメリカ人が比較的少なく、全体として学会がもう一つ盛り上がらなかったのは残念であった。私にとっての収穫は、脂質研究の様々な分野を垣間見ることができたことであろう。私が細胞膜表面に発現している受容体を研究

対象にしていることや、脂質研究の世界に入って一年あまりのため、PLA2、COX2や5-LOなどの酵素類、また喘息などの臨床に近い分野の知識が脆弱であったので貴重な勉強の機会であった。

私の仕事は、その内容から一方通行の口頭発表（しかも英語）では何もわかってもらえないおそれがあったので、ポスターで発表させて頂いた。何人かの外国の方が興味を示して頂き、一人の方が、とても面白いと言って頂けたのが嬉しかった。この時の助言なども参考に帰国後さらに実験を加え、12月7日に東京医科歯科大学で行われた『第6回東京プロスタノイド研究会』で初めて口頭発表を行った。急に準備したにも関わらず、幸いにもYIA(Young Investigator Award)という若手研究者向けの賞を頂くことができた。

イスタンブールで開かれた学会に参加し、いつもの実験生活から少し離れ、自分の仕事を見直し、多くの外国の方の研究への取り組み方を見られたことは、他では得難い経験であり、論文を読むことだけでは決して得られない貴重な体験である。新たな真実は、自らの手を動かして実験をこなす以外に出でこないが、そのヒントは、どこに転がっているかわからないのが、研究であることをあらためて感じた。今後とも自らの手を動かすことを忘れず、そして時には積極的に学会に参加し、様々なことを学んでいきたいと思っています。今後とも御指導、御鞭撻をお願いする次第です。

文献検索から見たリン脂質研究のトレンド

お茶の水女子大学・理学部・生物学科 小林 哲幸

リン脂質に関する研究は、約200年前に脳を材料に始められた。その後、生体膜の主要な構成成分として、その構造決定と代謝機構が地道に研究されてきた。しかし、1970年代に入って、トロンボキサンやロイコトリエンなどのアラキドン酸代謝物が発見され、1970年末には血小板活性化因子(PAF)の構造が明らかになった。この年代から、脂質研究はたいへん大きな変革の時を迎えた。細胞膜脂質に由来する各種の代謝産物が、多彩な細胞機能を調節するメディエーター分子であるとの概念が定着し、大きく花開いた時代であった。

本稿では、その変革の時である1980年から2001年の間の脂質研究の動向を探るために、リン脂質に関わるキーワードをもとに文献検索を行ってみた。検索ヒット文献数の年次変化の背景には、重要な発見や報告があったはずである。リン脂質研究に関わっている読者の方には、このグラフの背景にある重要な発見や報告を考えながら、グラフを楽しんで頂ければ幸いである。

検索条件は以下の通りである。

- ・用いたデータベース：National Library of Medicine のPubMed。
- ・キーワード：リン脂質に関わる化合物名について、以下の単語 (full spell のみ) で検索した。リン脂質 (図1); phosphatidylcholine、phosphatidylethanolamine、phosphatidylserine、phosphatidylinositol、cardiolipin、phosphatidylglycerol。リゾリン脂質 (図2); lysophosphatidylcholine、platelet activating factor、lysophosphatidic acid、sphingosine 1-phosphate。脂肪酸 (図3); arachidonic acid、linoleic acid、linolenic acid、oleic acid、eicosapentaenoic acid、docosahexaenoic acid。
- ・文献数の年次変化：5年ごとの特定の1年間に発表された文献数 (1980, 1985, 1990, 1995, 2000, および2001年)。

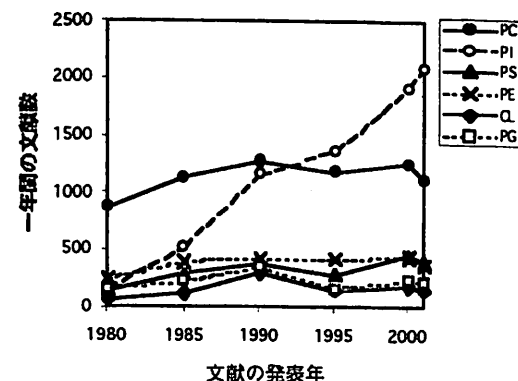


図1 各リン脂質に関する文献数の年次変化

1. リン脂質

図1に示すように、生体膜を構成する主要なリン脂質である phosphatidylcholine (PC)、phosphatidylethanolamine (PE)、cardiolipin (CL)、および phosphatidylglycerol (PG) をキーワードにしたときの文献数は、この20年余り大きな変動はみられない。たとえば、PCに関しては常に約1000件の文献が、毎年発表されている。

一方、特徴的な増加がみられるのは phosphatidylinositol (PI) である。1995年にはPCを超え、今なお増加していると思われる。これは、1980年代に開花した一連のイノシトールリン脂質代謝と細胞内情報伝達の研究とその後の発展に起因しよう。

小さな変化量ではあるが、phosphatidylserine (PS) に関する文献が、1995年から2000年にかけて増加した。この背景には、アポトーシス研究があるのかも知れない。なお、ここではデータを省略したが、sphingomyelin (SM) に関しては200-300件をほぼ一定水準で保っていた。

2. リゾリン脂質

リゾリン脂質の中で、ひときわ目を引く変動がみられるのはPAFである (図2)。1979年の構造決定後、急速に文献数が増大して1990年には700件に迫った。1991年にPAF受容体の発見がなされ、1990～1995年の間に最大ピークがあったと思われる。

Lysophosphatidylcholine (LPC) に関する年間文献数は驚くほど一定で、120件前後を推移している。ただし、文献総数が年々上昇していることが

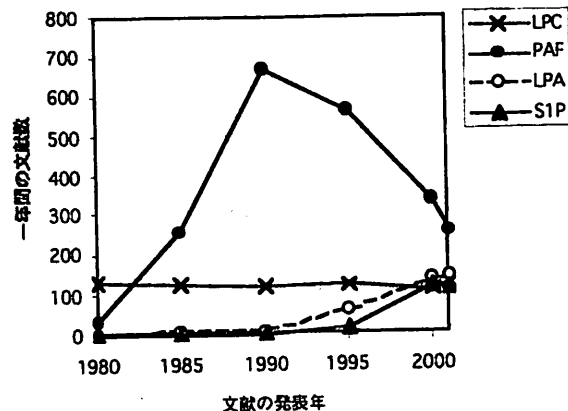


図2 各リソリン脂質に関する文献数の年次変化

らすると、割合は少しずつ低下していることになる。

Lysophosphatidic acid (LPA) については1990年まで低迷していたが、1995年にかけて増加し、現在も増加傾向にある。この場合、1996年にLPA受容体遺伝子がクローニングされている。また、sphingosine 1-phosphate (S1P) についての文献数もLPAの場合とよく似た変化をみせている。

3. 脂肪酸

脂肪酸に関する文献数の年次変化は、図3にまとめた。まず、顕著な変化はアラキドン酸(AA)にみられる。前述のように、1970年代にはアラキドン酸代謝産物とその代謝・生理活性に関わる発見が相次いだ。それを基盤にして、1985年にかけてさらに多くの研究論文が発表された。その後もアラキドン酸誘導体として、1992年にはアナンドアミド、1995年には2-アラキドンリグリセロールが発見されており、最近でも1000件近いレベルを保ち続けている。

リノール酸(LA)は植物油の主成分として、脂質栄養の観点で早くから注目され研究された。これに対して、グリーンランド先住民の食生活と動脈硬化の研究からエイコサペンタエン酸(EPA)の有用性が注目され、その後、 α -リノレン酸(LnA)やドコサヘキサエン酸(DHA)の研究も加わって、1990～1995年以降、いわゆる ω 3系列脂肪酸の研究が増加してきた。

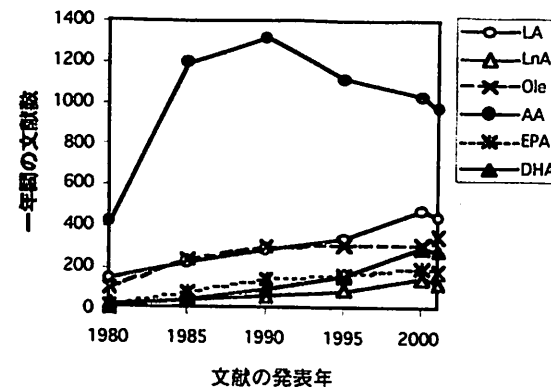


図3 各脂肪酸に関する文献数の年次変化

以上、限られた範囲でのキーワードをもとに、リン脂質研究に関わる文献数の年次変化を調べてみた。文献の数と研究の質とは異なったものかも知れないが、現れてきた数値をみて、改めてリン脂質研究の推移を実感できた気がする。また、これら世界の脂質研究の趨勢を左右するような重要な発見に、この日本脂質生化学会の会員が大きな貢献をしてきたことはたいへん誇りに思う。一方で、流行に惑わされない堅実な独創性の高い研究も高く評価されなければならない。

脂質研究において、次の5-10年間のトレンドを担うものは何であろうか？ 分子生物学的手法や質量分析をはじめとする機器分析の発達が目覚ましい。これらを駆使して、新たな機能分子が発見されるであろう。また、リン脂質分子種の網羅的解析から新しい発見が生まれることが期待される。集合体としての脂質やその動態解析も研究が進んでいる。脂質研究のネタは尽きない。

米国滞在時から考え続けていること

北海道大学大学院医学研究科 福嶋伸之

はじめに

筆者は北大に来る以前は米国カリフォルニアのサンディエゴ(University of California, San Diego/UCSD)にいました。およそ留学記らしいモノを読んでいますと、その気候がどうの、ボスがどうの、研究の進め方がどうの、生活がどうのと言うことに終止してしまっているようで、それはそれで多少の情報はあるものの、留学をした本人が何を感じたか、これからどうするかということが全く見えず、あまり面白いものではありません。では、自分はどうかと言われるとそれはそれで何を書こうかと頭をひねってみたのですが、やはり留学中にいろいろ多くのことを考えておりましたのでそのあたりのことをざっくりばらんに書き記してみたいと思います。筆者は会社勤めをしたこともありますし、日本の職を失ったこともありますので、以下に書くことは大学に居続けている方とは意見を異にするかもしれませんし、かなり偏りがあると言われるかもしれませんが、1つの意見あるいは提案として受け止めていただければ有り難いです。

何から書くべきか、思っていたことがたくさんあり過ぎてまとまりがありません。自分の思いをひところNHKスペシャルであった言い方になぞらえると「日本の大学はどこに行くのか」「日本の大学人(という言葉があれば)はどこに行こうとしているのか」とでも言うことになりましょうか。今、世の中では競争することが当然という風潮があるように感じます。この是非はともかく、「個」に根ざす西洋に端を発した現在の自然科学の領域で、しかも競争をすることで世界の最強国になったアメリカが主導するこの領域で、和を尊ぶ(と言えば当たりが良いが)日本が本当に競争できるのか。変革する世の中で官主導の大学はどうなるのか。おそらく誰でもが感じているとは思うものの真剣に議論されていないのではないかと思います。

ヒトあるいは個人とグループ

米国で感じたのはとにかく「対等であろうとする個」というものでした。頭では知っていても実際に経験するとこれまでのことをずいぶんと考えさせられるものでした。大袈裟に言うとも一種のカルチャーショックでし

た。もともと人に頼ったり徒党を組むことが好きではない筆者にはそういう点で居心地のよい場所でした。多くの方が御存じのように出身大学、講座、肩書き、年令、性別などを重視されることもなく(潜在的にはもちろんあると思いますが)、本人がその立場でどのようなことをして来たか、今何をしているかによって本人の「個」が評価されるわけです。日本にいた時、他人との会話の中に「どこの大学出身か」「どの講座で誰が教授か」「〇×先生のことは良く知ってますよ」などのことがでてくるのは必至でしたし、それをある種当然と思っていましたが、今から思うとこういうのは「付属物としての個」でしかない扱いなわけです。つい先頃米国の民間財団にグラントの申請書を出し、2次審査で落選をしてしまいましたが、その審査結果を見てみますとどこの誰かも知れない審査員が筆者のことを個人として(すなわち留学先のボスのグループの一員ではなく)高く評価してくれているのが分かりました。日本では海外留学から帰国しますとよく「あれは海外でやった仕事だからそのボスの仕事だ」ということを言われたりします。実際にそういうことがありますし、逆に正しく本人の仕事として評価されることもあるでしょうが、筆者には内容や本人のことを脇に置いた話のように聞こえて来ます。

言いたい事とは多少ずれて来ましたが、それはこういう場で言うと批判と捕らえられるので躊躇してしまうのですが、「講座」と言うものの存在価値です。筆者の米国滞in時には既にインターネットが発達しておりましたのでそれを利用し日本のポストを探しておりました。見て驚いたことはいくつかあります。1つは教授のポストですら研究内容が非常に狭められて、しかも手法まで限定して募集されている事があるということでした。これでは特定のごく少数の人を対象にしたものでしかないように思います。米国でポストをお持ちでいらした方はお分かりだと思いますが、米国ではこんな募集はほとんどありません(ポスト募集は別ですよ、これは主従の雇用関係がありますからね)。どういうこと?って聞いてみたいものです。別の驚きは、知っていたことなので驚きではないのですが、助教授以下の募集で研究テーマの限定とともに年令制限があった事です。テーマの限定は研究者の「個」を全部ではないにしても多くを捨てなさいと言う命令に近いものを感じられます。また、筆者のようにアカデミックに高齢で入った、したがって学位取得も遅い人間には年令制限は差別以外の何ものでもありません。多様な人間を排除しようとしているのか、年功序列を重んじているのか。講座が1つの安定した組織であるように維持す

るためには重要なのでしょう。インターネットを見ながら窮屈な管理社会の縮図をはっきりと感じました。テーマ限定の件で筆者は米国に行かざるを得なかったのが、非常に心に引っ掛かるものがあります。もっと具体的に言ってみましょう。自分の所属する講座の長がある日突然変わって（代わって、でもいい）「講座を維持していくために今後筆者のテーマにそって研究してもらう。グループで研究する事によってこのテーマを発展させる。やらない場合は研究スペースも与えないし、機械も使わせない」なんて言われたらどうします？本人と長との間に雇用関係があれば別ですが、そういう問題でもないですよ。極端な事に感じるかもしれませんが、「講座」がある限りこういう問題は起こり得るのです（以前同じ主旨を北大のある会合で発言しましたが、雇用関係を持ち出されて話をすり替えられた事がありました。やっぱり重要視されていないんでしょうね。）。これに任期制でも関わってくると事態はもっと複雑になります。既に任期制は公然の制度となっているようですが、これにはそれなりのメリットを与える必要があるものと思います。グループの仕事ではなく本人の好きなことをやらせる事でしょう。それに応じて任期の更新、昇進なり打ち切りを宣言すべきものだと思います。ただしその評価は外部の人を含めてされる必要があるのは言うまでもありません。つまり、まず自分自身の責任において自らのテーマで研究する（もちろん教育も）、そして、そのために必要であれば他人とグループを作る、その結果について可能な限り公正さを保った評価を受ける。結果が出ないならば次善のことを考える。こういう自立と自律、責任と義務があってこそやりがいが出てくるのではないのでしょうか。またまた話がずれてしまいましたが、ポストドク難民が増え続けるであろうこれから先に同じような気持ちを抱く人が多くなるのではないのでしょうか。しかも米国でも予算の偏りなどがあるそうで、行く所の無い人が増える事が他人事には感じられません。誤解のないように申しておきますが、講座の果たして来た役割は否定しませんし、プロジェクトの効率的推進のためにグループ作りも必要だとは思いますが、しかし、本来の西洋科学を進めるにはやはり「個」と言うものを基盤においた体制を持つ必要があるのではないかと感じています。米国がベストとは言いませんが多数の良い人材を生み出しているのはこういう背景があるからではないのでしょうか。また日本からの人材流出が言われて久しいですが、当然若いうちから独立できる機会を得ることが出来れば優秀な人は事情が許せばそちらに行きますよね。日本では理研など一部がそういう体制にし始めていま

すが、大学もそうになったら良いなあと思うのは筆者1人ではないはずです。

プロジェクトで思い出しました。筆者自身はもともと脂質研究をしていたわけではありませんので偉そうな事は言えないのですが、日本の脂質研究は世界で最も優れているのではないかと考えています。そういう背景があって、しかも歴史のある脂質学会が活動しているのですから、ポストゲノムあたりで大きな予算でも取れなかったのか不思議に思います。かつて脂質データベースを作成する事をしたそうですが、さらに果実を取る事のできるような研究も出来たのではないかと。例えば、生理活性脂質の網羅的単離、同定と、情報伝達という別の日本先端に行く分野などを組み合わせれば非常に有益かつ有効な研究になったのではないかと考えました。まあ、この辺は事情を知りませんので過去および現状への理解不足があればお詫びします。

それから、どうも日本の大学は役所と同じで縦割り意識が強いなあとも感じました。これも講座と言うものの為せる技ではないでしょうか。これもNHKの番組でやっていましたが、今は縦割りで仕切られた小組織よりも情報を縦横無尽に利用したネットワークが全体そして個人の仕事を押し進める駆動力になっているそうです。

上に述べた事とは関係がないのですが、米国にいてもう1つ驚いた事があります。日本人研究者の留学先の選び方です。筆者はインタビューをし、そこで研究をしている学生達と話をし、納得してから行くべき場所を決めましたが、全くそういう事をせずに人からの紹介で留学する所を選ぶ日本人研究者がいるのには驚きでした。M.D.の方に多いのですが、Ph.D.を持った研究者でも同様のことがありました。また有名な研究者だからという理由だけでインタビューもせずに留学先を選ぶ人が結構おりました。ここにも他人やその肩書等に頼っている姿が垣間見えますが、筆者には全く解せないことです。

研究費あるいは対価と評価

さて、そうは言っても帰国先を結局自分で探し当てる事が出来ず、ついで北大に来ました。上で偉そうな事を言って申し訳ないですが、残念に思っている事も事実です。帰る所を探していて気がついたのは（もちろん頭では分かっていたんですが）、筆者が応募出来そうな公募内容の件数が絶対的に少なかったことです。米国では assistant professor ならば年に20 -

30の応募可能な公募があったはずで、これらには特別な条件はほとんど無かったように記憶しています。対して、日本ではせいぜい5、6件ほどで、しかも条件などを見ていくと応募可能なものは2、3件でした。しかも本当に公正な公募なのかどうか定かではないわけです(後で選ばれた人を見れば分かりますけど)。もちろん取る方に内部事情があるのは知っていますから、本質的な事を変えるには上に述べたような講座の問題と合わせて大学の構造を変えるしかない、と言う所に行き着いてしまいます。

北大で研究を始めるに当たり困ったのは研究費とマンパワーです。上に言いましたように地力で何とかしたいと言うのが筆者のやり方ではありますので、「米国なら多少のスターターグラントなどが貰えたりするのに」と比べても仕方ない事を考えながら、民間の助成金、科研費、厚生省の研究費などに応募しました。どう考えても立ち上げには数百～1千万円ほど必要なのですが、こういう多額のグラントを平凡な助手が当てるのは至難の技であることを身を持って感じています。厚生省、通産省関係では個人で取るなんて言うのはまず無理ですよね。それでも今現在はどうにかこうにかなっていますが、それ以上にマンパワーの不足が最大の問題です。これについては後で思っている事を記しましょう。

UCSDのあるデパートメントの場合3～4万ドルの立ち上げ資金をもらえると聞きました。これは他にくらべると少ないと言う事でしたので平均的にはもう少し多いようです。でもこれで当座をやりくりしてすぐにNIHや民間のグラントに応募しはじめるのですが、これらはおおよそ日本円で年間5百万円から3千万のモノのようです。当てる事ができるかできないかは別にして、「さあこれからやるぞ」と言う人間にとっては本当にやりがいが出てくるものだと思います。だからあれだけの膨大(数10ページから100ページ、場合によっては段ボール1箱)なグラントを書き上げる事ができるのでしょう。いちどNIHのグラントを目にすることがありましたがそれはそれは確かにすごいものでした。民間のグラントは上述のように筆者自身も応募しましたが、科研費は当然、他の大型予算に比べても充実した内容でした。それに対する評価もおざなりなものではなく、2ページにもわたるものでした。もちろん評価も人がすることなので、論文の審査と同じく全く相反する評価が出ることもあり得ますし、いい加減な審査もある事は知っています。しかし大事な事は「これだけ(お金)出すんだからこれだけのこと(膨大な申請書)をしてもらわなければいけないし、それに対してこれだけのこと(評価)を返すんだ」と言う(出資者から見

ての)基本思想が存在していることだ感じました。そこには当然業績、応募内容が厳しく問われているはずですが、経歴や年齢はほとんど問われません。むしろ新しくポストを得た研究者が応募できるカテゴリーがある場合が多いようです。

筆者が米国に行った頃から「説明責任」「評価」などの言葉が日本でもはやりのように使われるようになったと記憶しています。その影響かどうか、科研費の一部でも評価内容が返ってくるようになったみたいですし、厚生省の研究費でも同様のようです。ただし、その内容は米国のモノと比べようありません。もちろん科研費の審査では、おそらく公平を期すためという理由で1人で数多くの申請書を見ることになりいちいち評価コメントできないというのは理解できるのですが、評価が応募した研究者への激励になるのであれば、そこには体制を変えた審査システムというものを考慮/確立して行く必要があるのではないかと感じます。分かりやすいので自分のことを一例にあげます。筆者はすでに論文を有していること、論文レビューの依頼も受けている(すなわち第3者からの評価を受けている)ことなどから自分自身をPrincipal Investigator/PIと考えています。そういう事からグラント申請書の審査もすることが可能だと思いますが、実際に筆者がそのようなことをすることは今のシステムの中ではあり得ません。筆者よりももっと優秀な数多くの研究者が同様の理由で貢献できないのであれば、それは人材の有効利用ができていないに等しいのではないかと思います。

研究費の話ではないのですが、個人に対する評価についても違いを実感しました。特にそう感じたのはテニユアになる時の評価です。大学やデパートメントによって違いはあるのですが、UCSDの薬理学講座では内部の人間による評価に加えて大学外で同じフィールドにいる研究者を何名か加えた評価を受けているそうです。全員で20名くらいと聞きましたが、そのうち外部の評価者が何名か、またどういった形式で行うのかも分かりませんでした。思うに、同じ講座であったとしても内部のすべての研究者が対象者の研究内容を十分に評価出来ないということのようですが、外部者を加える場合も競争相手などを含んでいるようでした。したがって評価はそれなりに厳しいものになるそうですが、それは仕方の無いことで、むしろ知り合いや1個人だけによるナアナアの評価を受けるよりははるかに公平さを保とうとする意志があるように感じられました。

大学院あるいは教育と自律／自立

医学研究科の多くはどこでもそうだと思いますが、大学院生の不足が大きな問題になっているはずですが(これに関しては北大医学部教官の集まりで聞いてみましたが、さほど重要とは思われていない事が分かり失望しています)。大学院重点化で大学院生を増やしたいのですが、ともに研究をしたい大学院生は数えるほどであり、多くの大学院生は片手に臨床医療を抱える医師であり、しかも一助手のところに興味を持って来てくれるなんて人はほとんどいません(研究にはそれなりの自負がありますので研究科内外の多くの人に紹介できる機会があれば良いのですが、縦割りの研究科や立場の事などで思ったことも出来ません)。これに対して他の研究科では多くの学生が修士過程、博士過程に進みますから黙っていても必然的にマンパワーが得られます。こういう環境で仕事をした人間と、マンパワーが得られない人間が同じ土俵で研究して競い合わなければならぬのですから不幸な事としか言い様がありません。まあ、そもそも学部4年生が特別実習と称して研究室に配属されそのまま修士過程に上がっていくような事も(かつて自分もそうではありましたが)おかしな話ではありません。これに対して米国で見たものは、大袈裟に言えば自立した大学院生あるいは大学院受験生でした。受験生の場合自分が受験するいくつかの大学院のプログラムの中から興味あるいくつかの研究室でインタビューをし、最終的に1つに絞ります。まさにポストドクと同じです。筆者自身の辿って来た道と比べて非常に新鮮に感じました。話はズレますが、こういう自立精神と言うのでしょうか、これとベンチャー精神というのは高い相関を示すのではないのでしょうか。また、米国のほとんどの大学院生は家を出て自活をしています、それに対して日本の大学院生は自宅から通うことも多いように感じられます。若い研究者ですら同じ傾向にあるのではないのでしょうか。家に対する考え、経済的支援の違いなどがありますが、やはりここにも「個」に対する「組織(家)」の構造が浮かんて来ます。

大学院生の活力は個人の自立感に根ざしたものだとは思いますが、大学院のプログラムではそれをさらに有効に発展させようとするものに感じられました。以下は良く言われていますが、彼等はグラントの書き方を経験し(実際にフェローシップを取るために書くこととなりますが)、外部講師を招いたり発表会を企画します。つまり彼等は多くの事に能動的になれるのです。与えられた事をする事の多い日本の大学院生が自らする事のうち比較可能なものは非常に少ないのではないのでしょうか。

さて、マンパワーの件で感じたことを記します。米国の場合、大学院はあくまでもプログラムであって、形ある組織ではないようです。各研究者(Principal Investigator/PI)はデパートメントに所属しながらこういう大学院プログラムに参加するのですが、1つではなく複数に参加出来ます(おそらくグラントの一部を提供するのだとは思いますが、詳しくは知りません)。それによってそれぞれのプログラムに所属している大学院生を獲得できるようになっています。したがって、学生にとってもPIにとっても選択の余地が広いわけです。対して、今の日本の大学院の体制は学校設置法などにより一研究室は一研究科にしか属せないことになっています(研究院は少し異なっているようですが)。北大を例にとって考えましょう。北大で神経科学を研究したいと思った学生が選択するのは医学研究科だけでなく薬学、理学、獣医学、工学など多岐に渡っています。しかし、実際に選ぶのは1研究科であり、他の研究科に所属するPIおよびその研究内容に接する機会というのは必然的に少なくなります。このような環境で果たして有効な研究ができるのか、教育を受けることができるのか。もし神経科学に関するプログラムがあれば、あるいは横断的な研究科がありそこに複数の神経科学のPI(研究室ではありません)が属していれば全く違った教育、研究を受けることができるでしょうし、活動度の高い大学院となるものと思います。研究院にすることによって、あるいは独法化でそういう方向に近付けば良いのですが、まだ先は長そうです。

最後に

長々と書いて来ましたが、筆者自身の偏見や米国の一地方に滞在したためによる偏った情報収集、さらには理解不足さらには努力不足な所があるかもしれません。また、多少曖昧な書き方もしていたり、書き足りない事があったりで、言いたい事が十分伝わっていないかもしれません。それらについてはお詫びしますが、このようなことを書いたのは少しでも若い優秀な人が自立／独立して研究できる環境を得られることができれば、という気持ちから出たものです。また、そういう考えがまだ新鮮に残っている時にそれを書き記しておきたいという気持ちから出たものでもあります。既に言い古されており今さら言うまでもない事もたくさん書いてありますが、別の言い方をすると、これらのことが問題点として未だ対処はもちろん認識すらされていないことを意味しているのではないのでしょうか。残念ながら自分ではなかなか変えることが出来ないのですが、そのような立場におられる方でもここに書いた一部の事にでも理解を示していただければ

ば有り難いですし、さらに御尽力くだされば望外です。勢いで書きましたので読みづらい所があると思いますが、ここまで読んで頂いた方がいらっしやれば深く感謝いたします。

会の活動状況

1 第44回日本脂質生化学研究会・研究集会の開催

実行委員長：西島正弘部長(国立感染症研究所)

日時：平成14年6月14日(金)、15日(土)

場所：東京都・早稲田国際会議場

演題数：シンポジウム5題、ランチョンセミナー1題、一般演題66題

参加者数：287名(事前登録144名、当日登録143名)

2 第44回日本脂質生化学研究会・総会の開催

平成14年6月14日(金) 17:00より、東京都新宿区早稲田国際会議場「井深大記念ホール」にて開催された。

総会次第

脊山洋右会長の挨拶の後、以下の議事が進行された。

(1)平成13年度事業ならびに決算報告

平成13年度事業報告ならびに決算報告がなされ了承された。

(2)平成14年度事業計画ならびに予算案

平成14年度事業計画ならびに決算報告がなされ了承された。

(3)役員・幹事の選出および名誉会員の推薦

平成15・16年度役員の選出：現役員4名の再任が決定された。

平成15-18年度幹事の選出：平成14年12月31日までの任期の幹事13名に加え、以下の5名の新幹事が推薦され、了承された。

池田 郁男(九州院・栄養化学)、上田 夏生(香川医科大学・生化学)、
小提 保則(京都大・生命科学)、多久和 陽(金沢大・医)、
徳村 彰(徳島大・薬)

名誉会員の推薦：本年度は名誉会員の推薦は無かった。

(4)平成15年度(第45回)研究集会準備状況の報告

実行委員長：東北大学大学院農学系研究科・宮澤陽夫教授

日時：2003年6月20日(金)、21日(土)

場所：仙台国際センター

(5)平成16年度(第46回)研究集会実行委員長の選出

投票の結果、熊本大学医学部 堀内正公教授が実行委員長に選出された。

(6)日本脂質生化学研究会の名称変更について

来年度より「日本脂質生化学会」の名称を使用することが決定された。英語名に変更はない。

(7)その他

- ・第15回国際植物脂質シンポジウム(岡崎、2002年5月12-17日)の報告と日本脂質生化学研究会からの協賛御礼がなされた(山田晃弘先生)
- ・PLM2001の報告がなされた(和久敬蔵先生)
- ・若手を中心にワーキンググループを構成し、活発な学会とするための準備を行うことが決定された。新井 洋由教授(東大院・薬)がとりまとめを行うことが決定された。

3 第44回日本脂質生化学研究会・第1回幹事会

日時：平成14年6月14日(金)12時-13時

会場：早稲田大学国際会議場 第2会議室

議事：上記総会に同じ

出席者：

(名誉会員、幹事)

赤松 稯、新井 洋由、五十嵐 靖之、池澤 宏郎、石塚 稲夫、石永 正隆、石橋 輝雄、和泉 孝志、伊東 信、井上 圭三、入谷 信子、岩森 正男、遠藤 章、大木 和夫、大島 美恵子、大西 正男、奥山 治美、笠間 健嗣、菊川 清見、櫛 泰典、工藤 一郎、古賀 洋介、齋藤 政樹、里内 清、島崎 弘幸、鈴木 邦彦、鈴木 康夫、清水 孝雄、杉田 陸海、鈴木 明身、瀬高 守夫、脊山 洋右、高野 達哉、瀧 孝雄、武富 保、竹縄 忠臣、谷口 直之、玉井 洋一、中川 靖一、中野 益男、西島 正弘、野澤 義則、野島 庄七、飯田 静夫、平林 義雄、廣野 治子、保坂 公平、松本 幸次、松本 亮、宮澤 陽夫、

保田 立二、山川 民夫、山田 晃弘、吉岡 亨、横山 信治、和久 敬蔵、渡辺 清博(以上計57名)

(オブザーバー)

横溝 岳彦(東大院・医・細胞情報)、山崎 均(学会事務センター)

4 第44回日本脂質生化学研究会・第2回幹事会

日時：平成14年12月9日(月) 午後6時-8時45分

会場：学士会館赤門分館

参加者：

(名誉会員、幹事)新井洋由、五十嵐靖之、石塚稲夫、遠藤 章、笠間健嗣、齋藤政樹、清水孝雄、脊山 洋右、竹縄忠臣、西島正弘、野島庄七、平林義雄、宮澤陽夫、矢野郁也、吉岡 亨、和久敬蔵(以上計16名)

(オブザーバー)横溝 岳彦、堀口麻衣子(学会事務センター)

議事：

[1] 平成14年度事業報告、決算案の審議

1)平成13年度事業報告

会員数 722名 (平成14年11月26日現在)

但し、平成13年12月-平成13年11月 新入会36名、退会45名

名誉会員 29名(事業計画の項参照)

賛助会員 17社(74口) (事業計画の項参照)

役員 会長 脊山洋右 (平成16年12月31日迄)

庶務幹事 清水孝雄 (同上)

会計幹事 山田信博 (同上)

会計監査 井上圭三 (同上)

幹事 (事業計画の項参照)

事業

イ)平成14年度(第44回)研究集会の開催

実行委員長：西島正弘部長(国立感染症研究所)

日時：平成14年6月14日(金)、15日(土)

場所：東京都・早稲田国際会議場

演題数：シンポジウム5題、ランチョンセミナー1題、一般演題66題

参加者数 : 287名(事前登録144名、当日登録143名)

ロ)脂質生化学研究 44巻の発行(本文282頁)

ハ)脂質生化学研究 Circular 2002 の発行(本文57頁)

ニ)総会及び幹事会の開催と審議事項

総会 平成14年6月14日(金) 早稲田国際会議場

第1回幹事会 平成14年6月14日(金) 早稲田国際会議場

第2回幹事会 平成14年12月9日(月) 学士会館赤門分館

幹事などの承認

1)平成14年12月31日任期終了予定の幹事の再任

(平成15年1月1日～平成18年12月31日迄)(氏名は後述)

2)以下5人の新幹事の承認

上田夏生(香川医科大学)、多久和陽(金沢大・医)、小堤保則(京都大・生命科学)、池田郁男(九州大・農)、徳村彰(徳島大・薬)が新幹事として推薦・承認された。

3)名誉会員の推薦：本年度は名誉会員の推薦は無かった

平成15年度(第45回)学会の準備状況の報告

実行委員長 : 東北大学大学院農学系研究科・宮澤陽夫教授

日時 : 2003年6月20日(金)、21日(土)

場所 : 仙台国際センター

実行委員長より研究集会の日時、会場、懇親会日時などの報告があった。

平成16年度(第46回)学会の実行委員長の選出

平成16年度学会の実行委員長に熊本大学医学部 堀内正公教授が選出された。

日本脂質生化学研究会の名称変更について

来年度より「日本脂質生化学会」の名称を使用することが決定された。英語名に変更はない。

その他

・第15回国際植物脂質シンポジウム(岡崎、2002年5月12-17日)の報告と日本脂質生化学研究会からの協賛御礼がなされた(山田晃弘先生)

・PLM2001の報告がなされた(和久敬蔵先生)

・若手を中心にワーキンググループを構成し、活発な学会とするための準備を行うことが決定された。新井 洋由教授(東大院・薬)がとりまとめを行うことが決定された。

2)平成14年度会計報告

平成14年度会計報告がなされ了承された。

[2] 平成15年度事業計画、予算案の審議

1)平成15年度事業計画

会員数 正会員、賛助会員とも増加の方向で努力する。

役員 会長 脊山洋右 (平成16年12月31日迄)

庶務幹事 清水孝雄 (同上)

会計幹事 山田信博 (同上)

会計監査 井上圭三 (同上)

幹事

(任期 平成15年12月31日迄)

青山俊文、赤沼安夫、秋野豊明、阿部敏明、荒木英爾、有田 斎、五十嵐靖之、猪川嗣郎、和泉孝志、板倉弘重、伊藤俊洋、井上圭三、入谷信子、遠藤 章、大島美恵子、岡本光弘、奥田拓道、奥山治美、川口昭彦、菊川清見、黒木由夫、斉藤政樹、渋谷 勲、杉田陸海、鈴木明身、谷口直之、玉井洋一、中川靖一、中野益男、西村顕治、野間昭夫、平林義雄、廣野治子、水柿道直

(任期 平成16年12月31日迄)

新井洋由、石永正隆、今泉勝己、大西正男、上田隆史、加納英雄、賀佐伸省、北 徹、楠瀬正道、斉藤恵実、菅野道廣、秦霞哉、平山 修、藤本健四郎、堀内正公、松沢佑次、三成 脩、宮下和夫、三輪匡男、保田立二、山下 哲、山田晃弘、山本徳男、吉岡 亨、吉本谷博、渡辺清博

(任期 平成 17 年 12 月 31 日迄)

猪飼 篤、石塚稲夫、石橋輝雄、伊東 信、大木和夫、笠間健嗣、櫛
泰典、古賀洋介、里内 清、瀧 孝雄、田口 良、竹縄忠臣、田辺 忠、
寺本民夫、中島茂、保坂公平、松本幸次、室伏きみ子、村田紀夫、横山
信治

(任期 平成 18 年 12 月 31 日迄)

池田郁男、岩森正男、上田夏生、宇田 裕、内海英雄、工藤一郎、小提
保則、島崎弘幸、鈴木康夫、瀬高守夫、高桑雄一、高野達哉、多久和陽、
塚谷博昭、徳村彰、二木鋭雄、西島正弘、宮澤陽夫

(以上 98 名)

名誉会員

山川民夫 (名誉会長)、赤松 稔、池沢宏郎、市原宏介、植田伸夫、遠
藤章、小野輝夫、数野太郎、金田尚志、鬼頭 誠、児島英也、斉藤国彦、
鈴木邦彦、武富 保、内藤周幸、野沢義則、野島庄七、野田万次郎、箱
守仙一郎、橋本 隆、林 陽、飯田静夫、藤野安彦、牧田 章、松本
亮、永井克孝、矢野郁也、山添三郎、山本 章、山本尚三、和久敬蔵 (以
上 31 名)

賛助会員:17 社 (計 74 口)

(10 口) エーザイ (株)、ジェンザイム・ジャパン (株)

(5 口) 大日本製薬 (株)、塩野義製薬 (株) キッセイ薬品工業 (株)、
小野薬品 (株)

(4 口) 三共 (株)、住友製薬 (株)、藤沢薬品工業 (株)、山之内製薬 (株)

(3 口) (株) 東京化学同人、雪印乳業 (株)、(株) エー・イー企画、
旭化成 (株)

(2 口) 花王 (株)、大塚製薬 (株)、(株) ヤクルト

事業

イ)平成 15 年度 (第 45 回) 学会

実行委員長 : 東北大学大学院農学系研究科・宮澤陽夫教授

日時 : 2003 年 6 月 20 日(金)、21 日(土)

場所 : 仙台国際センター

ロ)脂質生化学研究 45 巻発行

演題募集 (Circular2003 の発行時に) 2 月上旬

演題申込および原稿締切 3 月下旬

プログラム編成会議 4 月中旬

入稿 4 月下旬

講演集発送 5 月中旬

ハ)脂質生化学研究 Circular2003 の発行 2 月上旬

ニ)会議

日本脂質生化学会総会 平成 15 年 6 月 20 または 21 日

第 1 回幹事会 平成 15 年 6 月 20 または 21 日

第 2 回幹事会 平成 15 年 11 月下旬 -12 月上旬

2) 平成 15 年度予算案

平成 15 年度予算案が了承された。

[3]平成 15 年度 (第 45 回) 学会の準備状況の報告

宮澤陽夫教授より、学会の準備状況について説明があった。シンポジウム、ランチョンセミナーの演題と発表者を早急に決定するように要望がなされた。演題数によっては、会場を二つとすることもあり、詳細はプログラム委員会で決定することとなった。また、山田晃弘教授からの、「植物脂質シンポジウム」の参加者の本学会への参加を促進するために、植物のセッションを設けて欲しいとの意向を受けて、学会で植物のシンポジウムまたはセッションを設ける方向でプログラムを組むことが確認された。

[4] その他

- ・幹事が中心となって賛助会員の獲得に努力することが了承された。これに関しては趣意書を作成し、幹事全員に配布することとなった。
- ・幹事会に欠席した幹事にも、幹事会の資料を郵送することが了承された。
- ・5 年以上にわたって年会費を未納の会員は納入の意思が無い場合は退会扱いとすることが了承された。
- ・平成 15 年 1 月の日本脂質生化学会への名称変更に伴う会則の変更(名称変更のみ)を総会に諮ることが了承された。

- ・新井洋由よりワーキンググループの試案の説明がなされた。賞、入会費の無料化については次回の総会に諮り、早急に実行していくこととなった。それまでにWGはさらに詳細な案を作ることとなった。

5 日本脂質生化学会 ワーキンググループ試案

(新井洋由、山田信博、伊東信、横溝岳彦)

目標

- 1) 特に若手の会員の加入と発表の促進に力を注ぐ。
- 2) 参加者が魅力的に思えるような学会とする。
- 3) 幹事の役割を明確にする。

具体的な提案

1) 特に若手の参加を促すために

- ・ Young investigator award(40才以下?)、学生優秀発表賞、学会賞などをもうける。
- ・ 学生の発表を促すために、要旨集はA4、一ページとする。
- ・ 学生の研究集会の参加費は無料とする。懇親会は有料とするが、学生は安くする。
- ・ 演題募集に「短い時間の発表でも歓迎すること。口頭発表できる好機であること」を明記する。
- ・ 地方での研究集会を積極的に開催する。

2) 魅力的な学会にするために

- ・ テクニカルセミナー、ランチョンセミナーの励行。シンポジウムとは別に、特定のトピックを選んでセッションを組むことも可とする。
- ・ 要旨集に会員名簿を加え、共同研究の連絡が取りやすいようにする。
- ・ 他学会とも積極的に連絡を取り、ジョイント、合同シンポジウムなどを企画する。
- ・ 潜在的な脂質研究者の発掘を行う。(下記参照)
- ・ 予算にも依るが外人講演者、あるいは、招待講演者もうける。
- ・ 脂質の分析法のセッションを必ず作るようにして、他の分野の研究者が脂質の勉強、あるいは共同研究を進めやすいようにする。

3) 幹事の役割を明確にするために

- ・ 幹事、名誉会員は積極的に賛助会員を得られるように務める。
- ・ 幹事内でワーキンググループを作り、当学会に参加したことのない研究者を勧誘、推薦するシステムを作る。具体的には、葉書などで幹事に候補者をあげてもらい、ワーキンググループより勧誘の連絡をしてもらう。
- ・ 幹事の研究室からは最低一つは演題を出すように努力する。
- ・ 幹事の継続希望を本人に確認する。(幹事会出欠の往復葉書を利用する)

○平成14年度決算表及び平成15年度予算表(案)

収入の部	平成14年度		平成15年度
項目	予算	決算	予算
正会員会費	2,100,000	1,710,000	2,000,000
入会金	100,000	56,000	50,000
賛助会員会費	800,000	690,000	760,000
講演集売上	200,000	135,000	150,000
広告収入	900,000	879,979	900,000
利子	1,000	247	1,000
寄付金	0	30,000	0
雑収入	50,000	15,000	50,000
小計	4,151,000	3,516,226	3,911,000
前年度よりの繰越金	3,598,751	3,598,751	3,844,369
計	7,749,751	7,114,977	7,755,369

支出の部	平成14年度		平成15年度
項目	予算	決算	予算
研究集会補助	900,000	900,000	900,000
会報製作費	150,000	153,494	150,000
講演集製作費	700,000	614,964	700,000
旅費	100,000	25,320	100,000
郵送料・通信費	500,000	433,646	500,000
事務用品費	100,000	32,695	100,000
会合費	200,000	123,931	200,000
謝金	50,000	25,000	50,000
総会経費	5,000	0	5,000
事務経費	250,000	250,000	250,000
事務委託費	720,000	691,503	720,000
雑費	50,000	20,055	50,000
小計	3,725,000	3,270,608	3,725,000
次年度への繰越金	4,024,751	3,844,369	4,030,369
計	7,749,751	7,114,977	7,755,369

日本脂質生化学研究会として最後の決算表(案)であり、
日本脂質生化学会として最初の予算案です。

賛助会員

(10口) エーザイ(株)
ジェンザイム・ジャパン(株)

(5口) 大日本製薬(株)
塩野義製薬(株)
キッセイ薬品工業(株)
小野薬品(株)

(4口) 三共(株)
住友製薬(株)
藤沢薬品工業(株)
山之内製薬(株)

(3口) (株)東京化学同人
雪印乳業(株)
(株)エー・イー企画
旭化成(株)

(2口) 花王(株)
大塚製薬(株)
(株)ヤクルト

(以上 17 社 74 口)

日本脂質生化学会 会則

第1条 名 称

本会を日本脂質生化学会 (The Japanese Conference on the Biochemistry of Lipids, JCBL) と称する。

第2条 目 的

本会は脂質の領域における化学的、生化学的研究の発展と向上を図り、あわせて研究者相互の連絡および親睦を深めることを目的とする。

第3条 事 業

本会は、第2条の目的を達成するために、次の事業をおこなう。

- (1) 研究集会の開催
- (2) その他、本会の目的を達成するために必要な事業

第4条 会 員

本会の会員には次の種類がある。

- (1) 正会員は、脂質の化学的、生化学的研究に従事し、本会で定めた会費を納入する者。
- (2) 賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会を維持することに協力し、本会で定めた会費を納入する者。
- (3) 名誉会員は、幹事会の推薦により、総会の承認で決定される。名誉会員の会費は免除される。

第5条 役 員、幹 事、名 誉 会 長

- (1) 本会は、その運営のために、役員として会長1名、庶務幹事1名、会計幹事1名、会計監査1名をおき、役員会を構成する。
- (2) 本会の運営上の重要事項について役員会の諮問に応ずるものとして幹事をおく。
- (3) 役員および幹事は幹事会を構成し、会務の一切を処理する。幹事会は決定事項を総会に報告し、その承認を得るものとする。
- (4) 名誉会長をおくことができる。名誉会長・名誉会員は幹事会に出席して意見を述べることができる。

- (5) 会長、庶務幹事、会計幹事、会計監査の任期は2年とし、幹事の任期は4年とする。重任はさまたげない。

第6条 総 会

総会は、会長がこれを招集し、次の事項を審議し、決定または承認する。決定または承認は、総会出席者の半数以上の合意を必要とする。

- (1) 予算および決算に関する事項
- (2) 幹事会の提案事項
- (3) 幹事会の決定に関する承認事項
- (4) その他

第7条 経 理

本会を運営するために、次の如く経理をおこなう。

- (1) 本会の事業年度は、毎年1月1日より12月31日とし、予算および決算を会報に掲載する。
- (2) 経理は、会計監査によって監査される。
- (3) 当該年度の経理状況は、総会に報告され、その承認を得るものとする。
- (4) 本会の経費は、会費および寄附金による。

第8条 事 務 局

本会は会務に関する一切の事務をおこなうために事務局を置き、庶務幹事がこれを運営して、会員に便宜を供する。

附 則

- (1) 本会則は、総会の承認を経て変更することができる。
- (2) 本会の会費は、幹事会で決定し、総会の承認を得るものとする。

(平成14年6月14日改訂)

学会事務の取り扱い内容と連絡先

[I] 日本脂質生化学会事務局で扱う事務

1. Circular の原稿依頼・編集等
2. 研究集会の演題受付
3. 要旨集の原稿受付・編集等
4. 総会・幹事会の案内・資料作成等
5. その他

連絡先：日本脂質生化学会事務局

〒112-8610

東京都文京区大塚 2-1-1

お茶の水女子大学生活科学部内

Tel & Fax: 03-5978-5752

JCBL@bio.m.u-tokyo.ac.jp

[II] (財) 日本学会事務センターで扱う事務

1. Circular および要旨集の発送とその未着クレームの受付
2. 年会費の請求および徴収
3. 所属・住所・氏名等の変更の受付
4. 入会・退会の受付

連絡先：

〒113-8622 東京都文京区本駒込 5-16-9

(財) 日本学会事務センター 会員業務部

Tel : 03-5814-5810

Fax : 03-5814-5825

[III] 日本脂質生化学会会費

入会金 2000 円

年会費 3000 円

入会ご希望の方は上記の日本学会事務センター 会員業務部までお問い合わせ下さい。